

草庵仏教

第183号
(発行日)
2005年9月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX
(0798) 63-4488
(発行人) 土井紀明
address---kousien2720kimyou@ze
us.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第1と
第3木曜日の午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答⑭ 無三悪趣の願

L 「釈迦如来が仏説無量寿經に
説かれた阿弥陀仏の四十八願に
ついてお話し下さい」

D 「阿弥陀仏の願はどのような
誓願であり救いであるか、それ
を四十八願によって知ることが
できます」

L 「では四十八願はどういう誓
いなのですか」

D 「四十八願の内容を浄影寺の
慧遠という高僧は撰法身の願・
撰浄土の願・撰衆生の願の三つ
の内容に分けています。まず撰
法身の願は、阿弥陀仏ご自身に
対する願で、これは第十二願と
第十三願と第十七願にあたります。
これら三願は、法藏菩薩が
光明無量・寿命無量の仏（阿弥
陀）になり、阿弥陀仏の名を一
切衆生に聞かせて与えたいとの
願であります。次に撰浄土の願
は、阿弥陀仏の浄土は清浄であ
り功德の宝でかざられ、仏法の
香りに充ちて世界を教化する徳
もつ、そのような世界にしたい
という浄土に関する願で、第三
十一願と三十二願がこれにあた
ります。他の四十三願はすべて
撰衆生の願で、一切衆生を救う
て浄土に生まれさせて浄土の徳

(涅槃の徳) を与えたいとの願
であります」

L 「たとえば第一願はどういう
誓いですか」

D 「第一願の願文は
たとえ我、仏を得んに、**国に地
獄・餓鬼・畜生あらば、正覺を
取らじ。**

(わたしは仏になるとき、わた
しの国に地獄や餓鬼や畜生のも
のがいるなら、わたしは決して
さとりを開きません)

となつています。これは衆生が
生まれる浄土には地獄や餓鬼や
畜生がないことを誓われたので
す。しかも一度浄土に生まれる
と再び地獄・餓鬼・畜生という
三悪道の世界には戻らないとい
うことを第二願に

たとえ我、仏を得んに、**国の中
の天人、いのち終わりの後、
また三悪道にかえらば、正覺を
取らじ。**

(わたしが仏になるとき、わた
しの国の天人や人々が命を終え
た後、ふたたび地獄や餓鬼や畜
生の世界に落ちることがあるよ
うなら、わたしは決してさと
りを開きません)

L 「阿弥陀仏の完成された浄土
は地獄・餓鬼・畜生のない世界
であるといわれるのですね」
D 「ええ、浄土は大般涅槃の領
域で、清浄であり、安樂であり、
常にして壊れることがないとい
う性質をそなえているといわれ
ています。ですから浄土には三
悪道はないのです」

L 「なぜ、第一願に浄土には地
獄・餓鬼・畜生のない世界であ
ることを願われたのでしょうか」

D 「それは、私たちが地獄・餓
鬼・畜生の苦しみを生みだして
苦悩しているのを大悲されるか
らでありましょう。地獄・餓鬼
・畜生は死後の世界だけにある
のではありません。この世にお
いても地獄・餓鬼・畜生の状況
を私たちはさまざまに生みだし

て、その中で苦しんでいるから
です。地獄・餓鬼・畜生はわれ
らの内なる煩惱から出現してく
る状況なのです。それをまず阿
弥陀仏は悲痛されて第一願が建
てられたのでありましょう」

L 「私たちの現実を悲痛されて
本願を起こされた、そのことが
第一願あるいは第二願に表現さ
れているのですね。では地獄・
餓鬼・畜生をどう理解したら
いでしょうか」

D 「地獄は瞋恚の煩惱が外に生
み出す状況（外在化）といえま
しょう。たとえば、家の中で親
子や夫婦が憎み合いがみ合っ
ているなら、その家庭に安らぎ

はありません。憎悪とか恨みで
お互いが傷つけ合うことになり、
家の中が地獄の様相を呈し、一
人一人が地獄の苦を受けていき
ます」

L 「瞋恚の煩惱によって受ける
苦しみが地獄なのですね」

D 「ええ。人々の中にある怒り、
憎しみ、憎悪、それによって一
人一人が地獄の苦を受けます。
地獄は死後にのみあるのではあ
りません。観無量寿經では息子
のアジャセの怒りによって、ア
ジャセの父であるビンピサーラ
は殺害されていき、母のイダイ
ケは殺されかけるといふ事件が
起こりますが、その時イダイケ

は
この濁悪処（この世）は地獄・
餓鬼・畜生盈満して、不善のと
もがら多し」
(この世界は地獄や餓鬼や畜生
のものが満ちあふれ、善くない
ものたちが多すぎます)

と云うてこの世での地獄を言っ
ています」

L 「では餓鬼とは」

D 「餓鬼は食いの煩惱のゆえに
欲求不満の苦しみにおちいつて
いる状態です。ですから餓鬼は
貪欲の煩惱が生みだした（外在
化）した境界なり状況をいいま
す。欲望がどこまでも外に満足
を求めていきますと、人は餓鬼
になってしまいます。こんな話
があります。江戸時代に京都の
太融寺に円智坊という僧侶がい

ました。この人はもと大阪の人で、紀の国屋亦右衛門という人に仕えて商いの仕事をしていました。正直者だったので主人の亦右衛門が百両を与えて、独立して店をもたせました。彼はそれを元手に商売に励み、百両を三千両に、三千両を万両に、万両を十万両にしました。ところがある日、彼はその十万両をもって、主人の元に行き主人に与えて出家してしました。その後には円智坊という名の修行僧となつて生涯を送りました。その辞世の歌に

おちてゆく 奈落のそこを
のぞきみん いかほど欲の
ふかき穴ぞと

とあります。彼が出家した動機は、商売に励んでいる自分の心の中をふとのぞいたときに、恐ろしいほどの食欲な心を見て、ぞつとしたのだと思います。人間の心を失って餓鬼になつている我が身に驚いたのだと思いません

L「人間はあくなき欲望のためにいつでも餓鬼に等しい者になるのですね」

D「ええ。餓鬼のようになれば、どこまでも物足りよう、物足りようと外に求め、逆に不足や不満にさいなまされていきます」

*

L「畜生というのは」

D「畜生は愚痴の煩惱が原因となつて、外に現れてくる苦しみの状況といわれています。これ

も諸説有りますが、もともと愚痴というのは自己中心的な考えをいいます。物事を自分の都合だけを考へて生活していると、外のもの、すなわちお金とか名誉とか地位とか権力とか、そういうものに振り回され、そういうものの奴隷になつてしまします。また、畜生というのは家畜化された動物というイメージの言葉で、他のものに服従して主体性を失っている姿を表しています。自己中心的な考え(愚痴)は常に自分を正当化して、自分の悪や罪を認めない、いわば恥を知らない人間に墮してしまします。悪をなせどもへおはずかしいことをした」という慚愧がなくなる、いわばへ人の心を失つていく」という、そういう状況をも畜生といえるでしょう」

L「阿弥陀仏は衆生が地獄・餓鬼・畜生の苦しみを生みだしていることを大悲して、まず浄土に生まれる者はこの三悪道の苦しみから解脱せしめようとの願をおこされたのですね」

D「ええそうですね。そしてこの阿弥陀仏の願心を知ることによつて、私たちは個人だけでなく、地獄・餓鬼・畜生の状況をこの世の中に作り出し、そうしてその状況の中で苦しんでいるかを知られるのです」

*

L「阿弥陀仏の願心を知り、私たちの世界がどういう状況に陥っているかを知るのでね。」

イラクの戦争もアメリカに対する怒りや憎しみが9・11のニューヨークのテロとなり、そのテロへの怒りがアフガニスタンやイラクでの報復戦争になつて、まさに地獄のような殺し合いとなつています」

D「家庭や職場での人間関係から民族同士の争い、地域の紛争から大規模な戦争、まさに大小様々な地獄が現れてきます。そのもとは一人一人の中の食欲・瞋恚・愚痴の煩惱なのです。三悪道は個人的、社会的に感じざるをえません。なぜなら個人と社会は切り離せない」

L「阿弥陀仏の願心は人が個人的にも社会的にも私たちが三悪道を出していることを大悲したもうのですね。この願心を知りて私たちはそういう状態を厭い、そういう状態から解放されたいと願うようになるのですね。それまでは三悪道を出しているながら、なかなかそれに気が付かず、それを厭うことをせず、それゆえいつまでもその中で苦しみを続けていくしかならないわけですね」

D「それで阿弥陀仏は私たちに三悪道なき浄土に生まれさせようとして、そのため三悪道なき浄土を阿弥陀仏は成就してくださつたのです。しかも一度、浄土に生まれたらもう再び三悪道にはかえらない。そういう徳が浄土には成就している」

L「浄土の教えは、私たちの現

実の世界のありさま、ことに地獄・餓鬼・畜生の境界を照らし出し、私たちがそれらを厭い、浄土に生まれようと願わしめてくださる。そして私たちがこの一生を終えて浄土に生まれるならば、地獄・餓鬼・畜生の苦を受けない仏の身となるのですね」

*

D「ええそうですね。さらにいうと、私たちが三悪道を厭い、浄土を願つて生きる身になることは、この世の三悪道的なありさまを批判する眼を身につけしめられ、三悪道的なありさまを改めていきたいと願うようになる。そのことを聖人はお手紙に

極楽をねがい、念仏もうすほどのことになりなば、もとひごうだるころも、おもいなおしてこそあるべき

とか、この世のわるきをすて、あしきことをせざらんこそ、世をいと、念仏もうすことにてはさうろう

とか、
ともの同朋にもねんごろの心のおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもさうらわめ

と申されています。三悪道的ありかたを厭い、悪をしないようにし、善に心をむけることを願うようになると仰せ下さつています」

L「浄土を願つて念仏に生きるものは悪を厭い、善に心をむけるように導かれていくのですね」

D「そんなんです。現実には宿業深き身ゆえなかなかそうはならぬにしろ、そうありたいと常に願うように導かれていく。それが私の中から起こつてくるのではなくて、浄土の働きによつてそうなるのですね」

L「悪を好んで恥じない者が、悪を厭い、善を願うようにとだんだんに導かれていくこと、そのことが浄土の働きだといわれるのですね」

D「ええ。浄土はへ浄化された覚りの世界」という意味と共に、へ土を浄めるへ穢土を浄化する」という意味があります。それは阿弥陀仏は単に私たちが浄土に生まれさせるだけではなく、私たちが浄土に生まれさせていく道を通して、この濁悪の世界(穢土)を浄化していこうと働きかけてくださつていられるのです」

L「そうするとこの世を浄化する働きを浄土の功德はもっているのですね」

D「太陽はそれ自身が明るいとともにも他の闇の世界を照らして明るくして下さるように、浄土はそれ自身光明世界であるとともに、闇の世界を照らして、明るくして下さる働きなのです」

L「浄土は単に静的な領域ではなくて、ダイナミックに私たちの世界に働きかけて、私たちの世界を浄化しようとしておられるのですね」

D「そうお聞きしています」

歎異抄

後序第三講

法然聖人のおおせには、「源空（法然）が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房（親鸞）の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」とおおせそうらいしかば、当時の一向専修のひとつとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともそうらうらんとおぼえそうらう。

（歎異抄後序より）

（現代語訳）

そこで法然聖人に、詳しい事情をお話ししたところ、「この源空の信心も如来からいただいた信心です。善信房の信心も如来からいただいた信心です。だからまいったく同じ信心なのです。別の信心をいただいておられる人は、この源空が往生する浄土には、まさか往生なさることとはありますまい」と法然聖人が仰せになったということでありました。

ですから今でも、同じ念仏の道を歩む人々の間で、親鸞聖人のご信心と異なっておられることもあるのだらうと思われ

*

親鸞聖人が吉水の法然聖人のもとに居られたころ、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」と言われたので、他の法然聖人のお弟子方が「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」と、法然聖人の信心と同じであるはずはないと批判されたので、その

是非を定めようということになり、法然聖人の処に行つて、子細を述べたところ、「源空（法然）が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房（親鸞）の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。」と法然聖人は仰せられたのです。ともに阿弥陀様から頂いた信心だから、同一の信心だといわれたのです。ここで「ともに阿弥陀仏からいただいた信心である」ということは、裏から言えば真実の信心は凡夫の方では起こせない、作れないということを意味しています。もし凡夫の側で起こした信心なら、それは単なる凡夫の心ですから煩惱をまぬがれません。このような信心では浄らかな浄土に生まれることができないといわねばなりません。

また、凡夫の作った信心なら、壊れる心配があります。実際、信心が壊れた話がよく聞きますが、その信心は凡夫の側で固めた信心だからです。

又「私は決して信じて疑いません」というような力みのある信心の話を聞きま

す。「決して疑いません」と力まねばならないほど、本人が気が付かないけれど、内心で疑っているのです。疑うことを怖れているかぎり、疑っているのです。

それと、凡夫の起こした信心はめいめいの心で作りに上げた信心ですから、人によつて異なってくるのは当然です。百人いれば百人、その信心は違つてきます。

これを「自利各別の信心」と申します。

つまり凡夫の作った信心は煩惱が混じり、壊れる恐れが常にあり、人によつてそれぞれ違い、疑いが根になっているのです。

たまわりたる信心ということは、阿弥陀様から与えられた信心ということで、

その元に阿弥陀仏が凡夫の心に信心を与えたいと願われ、そのように働きかけて下さるといふことがあるのです。そこで聖人は「阿弥陀仏は、凡夫には信心が起りようはないと見通しておられる」と受けとつておられます。本典『信巻』に「しかるに無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。」（信樂釈）

（はかり知れない昔から、すべての衆生はみな煩惱を離れることなく迷いの世界に輪廻し、多くの苦しみに縛られて、清らかな信樂がない。本来まことの信樂がないのである）

と述べられています。この凡夫のありさまを知り抜かれて、阿弥陀仏の方から信心を与えようとするのです。それを『信巻』の同じ（信樂釈）には

如来、苦悩の群生海を悲憐して、無碍大の淨信をもつて諸有海に回施したまえり。

（如来が苦しむ衆生を哀れんで、この上ない功德をおさめた清らかな信を、迷いの世界に生きる衆生に広く施し与えられたのである）

とあります。しかも与えたもう信心（淨信）の自身は

すなわち利他回向の至心をもつて、信樂の体とするなり。（信樂釈）

で、衆生を救おうとおめぐみくださる至心であると申されています。至心とは真実心、まことの心です。まごころです。阿弥陀仏の大悲のまことの心が私の届いて信心になってくださるのです。大悲のまごころの結晶はお念仏であります。「我が名を称えよ」と仰せ下さる念仏往生の誓いはまことに無碍大なる大悲のまごころ

ろ。このまごころを聞いて念仏するところに大悲のまごころは行者に届いて信心になってくださる。否、お念仏だけが大悲のはたらきではなくて、浄土の三部經の教説も、それをお伝え下さる諸仏善知識のお仕事も、すべて大悲の光明の働きであつて、それによつて私たちに阿弥陀仏の大悲の願心が届いて凡心に一つになつてくださるのです。阿弥陀仏の真実の願心（至心）が信心になるのですから、如何なる人の真実信心もたまわりたる大悲の願心の外にはありません。ですから共に同一の信心であります。（信樂釈）

この心はずなわち如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定の因と成る。

（この信樂は、阿弥陀仏の大きい慈悲の心にほかならないから、必ず真実報土にあります。大悲の仏心である信心の因によつて浄土に生まれるのですから、銘々の「自利各別の信心」では同じ阿弥陀仏の浄土に生まれる保証はないのであります。）

（了）

《秋季彼岸法要》

9月22日（水）

午後2時始まり

* どなたでもご自由にご参詣ください。

仏に会うまで 22

(インド旅行記1)

こうして昭和45年(5才)の1月にインドに旅することになった。もう3年も前のことから、詳しいことは忘れてしまったが、しかし強烈な印象を残した旅となった。「仏に会うまで」の趣旨からいささか離れることになるが、少し書いてみたい。

昭和45年といえば1970年、その頃欧米ことにアメリカを中心に、人種問題やベトナム戦争や公害問題などを背景に、既成の思想や文化に対抗するカウンターカルチャーの運動が盛んであった。それを担った若者はヒッピーとなって世界を放浪し、ことにインドが彼等のあこがれの地になっていた。そういう時代の中でインドに旅行したのである。出発日、伊丹空港に内垣日親師を中心に行十人ほどが集まった。エジプト航空に乗りこんで、最初に着いたのはフイリピンのマニラ空港であった。空港待ちで外には出なかったが、生まれて初めて外国に出たという一種の感動があった。空港のトイレで小用を済ますと外でボーイさんがいて手を拭くタオルまで出してくれたので、「まあ親切な」と感激したら、お金を要求されたのでとまどった。小銭を渡したが、それ以後、外国ではトイレに入るとしばしばお金がいることを初めて経験した。バンコック空港を経由して、ようやくインドについたのが夜中の2時。ボンベイ(現在のムンバイ)空港に降りたときたんムツとするような熱気と何とも云えない臭いがした。いまままで経験したことのない臭いで、これがインドの国の臭いであった。国には国の臭いがあることを知った。入国手続きを終えて、外に出ると、トタ

ンに幾人かのコジキが寄ってきた。それも服も身体も汚れていた。へああ、ここはインドなんだ」と実感した。これ以後、コジキから(バクシー)と施しを要求されるのはインド旅行中どこでもついてまわった。それから迎えに来ていたミニバスに乗り込んだ。真夜中、いったいこれからどこに行くのかと思いつつ外を見るも暗くてよく分からない。そうこうしている内に大きな屋敷のようなところに着いた。ホテルのように見えなかった。ここはどこなのか分からないまま中に連れられていき、一室をあてがわれた。粗末なベッドに一人寝ることになった。早朝ラジオからお祈りのような宗教曲が聞こえてきた。窓の外はおだやかな林ですこぶる気持ちの良い風景であった。インドは何ともいえない(独特の空気)があつてそれがとてもいい。朝食のため食堂に通されると、3人ばかりのインド人(実は修行僧だったのだが)が床に直に座っていて、そこで食事を共にすることになった。最初に食前の祈りのようなものが長々と行われ、やつと給仕の子供たちが食事を一人一人に運んでくれた。大きな金属のさらに米飯や初めて見るおかずが山盛りにもられた。食べ始めると非常に辛く、まずく、コップの水で流し込むしかなかった。給仕の子供が更に「こうとするので(へも)うい」とアタマを振るとさらに盛るので困った。アタマを横に振るとインドでは「OK」と言う意味になるのをその時は知らなかった。他の人から、手を皿にかざして(バス)といつて断わるのだと教えられた。こうしてやつと食事が終わって庭に出た。一行の日本人の若者が一服タバコを飲み出すと、近くのインド人から「ノー」と直ぐに注意を受けた。その後、屋敷の中を案内して貰って初めてここがヒンズー教の道場(アシラム)だと分かった。食事がまずいはずだった。一般のインド人でも修行道場の食事は大変まずいといっていたので、我々の口にあうはずはない。この道場に二日間泊まったが、男女別々の場所に分けられ、女性の泊まっている棟には許可なくして行くこと

はできない。

ボンベイから次にオーランガバードに行き初めてホテルらしいところに泊まった。次の日先ずエローラを見に行く。7世紀から10世紀にかけてできたエローラ石窟は入り口の近くは仏教窟群で中は暗かったが、仏教僧がこの大きな洞窟でかつて修行していたことを憶念しながら見て回った。ど

も耳に気持ちよく聞こえる。庭に出ると白人のヒッピーが庭掃除をしていた。午後、ボンベイの街にバスで出かけ、初めてインドの街を目の当たりにした。同行者のだれも無言になった。外に展開する光景は日本の風景とは余りにも違いすぎて、これが同じ地球上の国なのかと目を見張り、外の光景に釘付けになった。何しろ外国に出たのが初めて、それも3年前のインド。何もかにもが初めて見るようなものばかりであった。顔も服装も言葉も街の建物も道路の状態も店で売っているものも聞こえてくる音楽も、それに乞食が道にたくさん座っている。ボンベイの町並みはイギリスの統治下だったこともあり、建物は薄汚れはしていたが綺麗な装飾のある建造物が並び趣がある。ただそこを離れるとあちこちに極貧のスラム化した小屋がズラリと並んでいて、見るのがとても辛い。インドでは(貧困がどういふものか)に説明はいらない。目の前にモロに展開するのだ。あれこれを見てみると、よその国に来たというよりも、次元の違う世界へ来た感じがした。しかしそれは、もし私がもっと高齢者であったり、あるいは感性が違っていたら、それほど強烈な印象にはならなかったかもしれないが、とにかくインドの現実を見た最初の晩は興奮して一睡も眠れなかった。アシラム(道場)を出てから、日本女性と結婚しているインド人の家庭に泊めて貰うことになった。ボンベイから郊外電車に乗って彼の家に行く。電車は汚いその頃からインドでは女性専用の列車が連結されていた。泊まった家は狭いので雑魚寝のようにして寝袋で土間に寝た。結婚して10年以上もインドにいてその日本人の奥さんからいろいろインドの話聞かせて貰う。日本人がインドで長年暮らすということは容易ではなく、それも裕福でなければなおさらであると思った。

ボンベイから次にオーランガバードに行き初めてホテルらしいところに泊まった。次の日先ずエローラを見に行く。7世紀から10世紀にかけてできたエローラ石窟は入り口の近くは仏教窟群で中は暗かったが、仏教僧がこの大きな洞窟でかつて修行していたことを憶念しながら見て回った。深い精神性を感じた。神像も同様、神秘性をたえている。次にヒンズー窟群に進む。そうして内垣師が(ここで死んでも良い)とまでいわせたカイラーサナータ寺院の中に入った。寺院の全体が岩石をくりぬいてできたもので、見事な彫刻と何とも形容しがたい神秘そのものの殿堂に圧倒された。内垣師がいかに感動したかが十分納得できた。次にジャイナ教の窟に行こうとしたが、もう疲れてしまい殆どの者が止めた。ところが同じ一行の中に年輩(60才を過ぎていた)の女性もつと見たいとさらに進んでいった。その元気さと情熱にびっくりした。その女性というのがずっと後になって分かったのだが、当時京都美大の日本画の教授で、今回お弟子の研究生を3人ほど伴って、この旅行に参加したのだった。教授の名は秋野不矩女史で、晩年に文化勲章を受章された。そういう人だったので我々とは意気込みも情熱も違っていた。次に1819年に発見されたアジャンター石窟に行く。こんな奥深い林の中によく造られたものだし、また修行僧たちはこんな所に住んでいたのかと感銘する。洞窟内の壁画が素晴らしく、この菩薩像はるか日本の法隆寺の壁画の菩薩像の源流ともいわれている。大小30ほどもある仏教石窟で、前1世紀から7世紀までに造られたとのこと。紀元前後の仏教の面影を偲ぶうる石窟もあって、中にスツーパー(仏舍利塔)だけをまつている。その前で「ブツダン・サラナン・ガツチャアミー」とパリー語の三帰依文を私が称えていると、入ってきたヒンズー教徒の集団が私を見て、「仏教徒だ」と言っているのが聞こえた。インドでは仏教徒は少数派である。(続)

ボンベイから次にオーランガバードに行き初めてホテルらしいところに泊まった。次の日先ずエローラを見に行く。7世紀から10世紀にかけてできたエローラ石窟は入り口の近くは仏教窟群で中は暗かったが、仏教僧がこの大きな洞窟でかつて修行していたことを憶念しながら見て回った。深い精神性を感じた。神像も同様、神秘性をたえている。次にヒンズー窟群に進む。そうして内垣師が(ここで死んでも良い)とまでいわせたカイラーサナータ寺院の中に入った。寺院の全体が岩石をくりぬいてできたもので、見事な彫刻と何とも形容しがたい神秘そのものの殿堂に圧倒された。内垣師がいかに感動したかが十分納得できた。次にジャイナ教の窟に行こうとしたが、もう疲れてしまい殆どの者が止めた。ところが同じ一行の中に年輩(60才を過ぎていた)の女性もつと見たいとさらに進んでいった。その元気さと情熱にびっくりした。その女性というのがずっと後になって分かったのだが、当時京都美大の日本画の教授で、今回お弟子の研究生を3人ほど伴って、この旅行に参加したのだった。教授の名は秋野不矩女史で、晩年に文化勲章を受章された。そういう人だったので我々とは意気込みも情熱も違っていた。次に1819年に発見されたアジャンター石窟に行く。こんな奥深い林の中によく造られたものだし、また修行僧たちはこんな所に住んでいたのかと感銘する。洞窟内の壁画が素晴らしく、この菩薩像はるか日本の法隆寺の壁画の菩薩像の源流ともいわれている。大小30ほどもある仏教石窟で、前1世紀から7世紀までに造られたとのこと。紀元前後の仏教の面影を偲ぶうる石窟もあって、中にスツーパー(仏舍利塔)だけをまつている。その前で「ブツダン・サラナン・ガツチャアミー」とパリー語の三帰依文を私が称えていると、入ってきたヒンズー教徒の集団が私を見て、「仏教徒だ」と言っているのが聞こえた。インドでは仏教徒は少数派である。(続)